

## 今月の巻頭言

# 「ものの見方、考え方」



柏崎市立教育センター

副所長 中山 博迪

先日あるテレビ番組で、アメリカ人の著名な医者が「現在の西洋医学はあまりにも専門的になりすぎ、人間の各部をミクロ的にしか見ず、人間を全体として見るマクロの視点を失っているのではないか。」というような疑問を投げかけていました。

またあるWebサイトには、次のようなコメントが紹介されていました。

○「昔の医者は、患者を一人の人間としてマクロの目でみていた。患者の顔色、皮膚の状態、舌や爪を見て脈拍をはかり、患者の訴えを時間かけて詳しく聞き、総合的に判断していた。現在の医者はあまりに専門的になりすぎ、高度な医療器具により問題の部位の悪化した状態を数値や画像などのデータをもとに診断し、症状の悪化を止める薬を投与したり処置したりする。悪化が進んでいる場合は、悪い部分を切除し当面の症状の改善に力を入れているように見えてしまう。」

○「医学も大変進歩し、病気に対する処置も高度なものとなっており、次々と新薬が開発されていることを考えれば病気は、無くなりそうなものである。しかし病気も病人も一向に減らず、患者は病院に溢れているという現実がある。一方、多くの自治体では、医療費の予算の占める割合が増え続け、財政的にも厳しい状況にきている。何か本質的なところで間違っているのではないかと思わず考え込んでしまう。」(これらの意見には、当然賛否両論があるかと思えます。)

さて、教育の世界を「ミクロな目」で見るとすれば、「子どもたちに体力や学力をつけるには、どうしたらよいか」とか「思いやりのある子どもに育てるには、どんな働きかけが必要か」などと現場の実態を把握し、具体的な手だてを考える時に役立ちます。

また「マクロな目」で見るとすれば、幼稚園・保育園から中学校までの発達段階やライフステージ全体を見渡して「何歳までにどんな力を身に付けさせるか」とか「中学校卒業までに、どんな子どもに育てて欲しいか」とか、具体的なイメージをもって指導に当たる時に役立ちます。どちらも大切であることは言うまでもありません。それぞれが縦糸・横糸となって教育の営みが成立すると思うからです。

私自身の教員人生をふり返ってみると、恥ずかしいことですが「マクロな目」で捉えられるようになったのは、管理職や行政経験をさせていただいた40代半ばからのような気がしています。特に若い頃は試行錯誤の連続で、進んでサークルや研究会などに出かけては、指導法のノウハウを学び、授業に取り入れたものでした。また課外活動などでも子どもたちにスキルを身に付けさせるために随分無茶な指導もしてきたなと思っています。

「木を見て森を見ず」といったミクロ的な集中力が格段のクオリティ(質)を発揮することがあります。しかし、それはマクロの視点を持ち合わせたディレクション(方向)があればこそ力が発揮されるのではないかと思っています。一例として冒頭でも紹介しましたが、医学もミクロな目で見た場合とマクロな目で見た場合とでは、見える風景が随分異なってきます。

私たちは、「ミクロな目」と「マクロな目」の両方を常に持ち合わせながら、子どもたちの真の幸せのために教育に当たりたいと願っています。